2021
春号
2021年2号　No.5
ニッケ教育研究所　会報誌

未来みらいウォッチ Watch

生き抜く力にあふれた子どもたちを育むコミュニティー

特集

私がつくる子どもの笑顔　第１回

『元気に登校！笑顔で下校！』の学校をめざして

教育環境を考える

教育環境は“３層のゆりかご”

インフォメーション

特別講演動画公開のお知らせ
「親子のふれ合いを通して深める学び」

※写真は、スズランです。

ニッケ教育研究所
一般社団法人
ニッケ教育研究所
NIKKE Institute of Education

“誰も置き去りにしない”
生き抜く力にあふれた
子どもたちを育むために

ニッケ教育研究所

インフォメーション

特別講演動画公開のお知らせ

勉強って楽しい！　友だちって素敵！　感謝することって大事！　自分が変わっていくってスゴイ！　生きているって最高！
子どもたちとの会話やふれ合いを通して、大人たちも一緒に学び、深めていくことの素晴らしさを実感できるお話です！

ホームページで「講演動画」公開中！

特別講演
「親子のふれ合いを通して深める学び」
講師　森川 正樹 先生《関西学院初等部 教諭》

教育関連の身近なお話を紹介する「コラム」も随時更新中です。
ニッケ教育研究所のホームページを、是非ご覧ください。

https://nikke-edu.org/

一般会員募集

私たちと一緒に、「子どもたちが生き生き伸び伸びすごせる環境づくり」に参加していただけませんか？
子どもたちは“未来の宝”です。私たちが発信する未来の宝を育む情報を、学校・家庭・地域で是非ご活用ください。入会のお申し込みは、ホームページでご案内しています。

編集後記

今まで経験したことのない環境に置かれたり、新しいことを身に付けようとしたりするとき、誰しも不安や恐れを感じます。これは、心が「安全・安心が確保されている今」に引き留めようとする力だと言われています。何かを身に付けるためには、「知識を学ぶ」ことに加えて「実際にやってみる」ということが必要ですが、「失敗したらどうしよう」とか「目立つのは恥ずかしい」などの考えが心に浮かび、なかなか前に進めないという場面があります。このような時には、同じ思いの仲間がいることで心を強く持てることができますし、努力した結果がどうであれ「大丈夫だよ」と言ってくれる周囲の励ましが心の支えとなってくれます。子どもたちが伸び伸びと、よき仲間とともに新しいことにチャレンジし身に付けていける環境をつくることが大切だと感じています。

一般社団法人ニッケ教育研究所
理事長　楠本　景央

未来みらいウォッチ Watch
2021　春号（年４回発行）No.5
2021年４月20日　発行
本紙掲載の記事は、複写・複製・転載を禁じます。
《発行》一般社団法人ニッケ教育研究所
〒541-0048 大阪市中央区瓦町３丁目3-10
TEL: 06-6205-6665　https://nikke-edu.org/

私がつくる 子どもの笑顔

子どもたちの元気な声や輝く笑顔にあふれた学校をめざして、現場ではさまざまな取り組みがなされています。新企画「私がつくる 子どもの笑顔」では、現職の校長先生に学校づくりの具体例を紹介していただき、子どもたちを育む教育環境について考えていきます。第１回は、大阪市立菅原小学校の岡田香子校長です。

第1回 『元気に登校！笑顔で下校！』の学校をめざして

《大阪市立菅原小学校》 岡田（おかだ） 香子（きょうこ） 校長

春。6年生が巣立ち1年生が入学して、まっさらな、小学校の四季が巡り始めています。

私は、子どもたちと同じ場所で同じ季節を味わい、その育ちゆく姿を目の当たりにすることができるという、この上なく幸福な仕事に恵まれました。せめてもの恩送りは、これからの子どもたちの学びを、より住（よ）きもの、より確かなものにすることだと思っています。

【 元気に登校！笑顔で下校！】

私のめざす学校は、子どもたちが「元気に登校！笑顔で下校！」できる学校です。

「元気に登校」するには、早寝早起き朝ご飯といった、家庭での基本的な生活習慣の確立はもちろんのこと、通学路での地域の方々からの「おはよう！がんばっておいで！」という励ましも、大きな支えになります。そしてどの子にとっても学校は、「そこへ行けば楽しいことがある」「会いたい仲間がいる」と、はずむ足どりで向かうことのできる場でなければなりません。

「笑顔で下校」するには、「今日も一日楽しかった」「勉強が分かった」と感じられる、一日の学校生活への満足感や明日への期待感が必要です。「また明日！」と笑顔で手を振る子たちが、どうか明日も元気に来てくれますようにと、毎日祈る思いで見送っています。

「元気」のベースには「安全」が、「笑顔」のベースには「安心」があります。学校、保護者、地域の方々など、子どもを取り巻くあらゆる大人が手を携え、子どもたちの安全と安心を保証することが、『学びの環境づくり』の第一歩です。

【 と・も・に 】

新型コロナウイルス感染症の影響による臨時休校で始まった令和2年度。多くの行事が中止や変更になり、さまざまな活動が感染症対策のために制限されました。マスクをつけ、人と距離を取り、大声を出さず。子どもたちにとっては（大人たちにとっても）、不安の多い一年でした。

そのような状況のなか、最終学年である6年生の一年間の合言葉は、「ともに」でした。共に過ごせない日々があり、共に活動できないもどかしさがあるなかで、「ともに学ぼう」「ともに成長しよう」「ともに乗り越えよう」・・・。6年生の教室にはいつも、「ともに」があふれていました。

この「ともに」の精神と行動は、SDGsの理念である「誰も置き去りにしない」にも通じます。ウイルスの脅威にともに立ち向かい、制約があってもできることをともに探し、ともに歓びを分かち合ってきた子どもたち。仲間と心を合わせてピンチをチャンスにかえてきた経験は、この子たちの将来や、この子たちが創造する未来の社会に、きっと大きな意義をもたらすことでしょう。

【 ことばの力 】

自尊感情の低い子、「キレやすい子」は、えてして語彙が乏しいものです。「ウザイ」「ムカツク」「シネ」「キエロ」・・・。

ことばには、力があります。人の心を温かくする力も、勇気づける力も、ときには傷つける力も。だからこそ、人と人とが心を通わせ、よりよい関係を築くために、ことばの力を磨き高めることが大切であると考えています。

豊かなことばの力の獲得には、上質なことばのシャワーが不可欠です。私たち大人は、子どもたちの存在そのものへの肯定・受容・信頼・尊敬・共感・愛情といったエッセンスに満ちたことばのシャワーを、絶えることなく注ぎ続けたいものです。

丁寧で、具体的なことばを用いて子どもを称賛し承認することが、子どものことばの力と自尊感情を、同時に高めることにつながるのではないでしょうか。

「言葉は身の文（ことばは　みの　あや）」と言います。その人の用いることばが、その人の人格や品性を表すという意味です。豊かなことばの力は、より美しく生きる力となります。子どもたちには、ことばの力を自在に駆使して思いを伝え合い認め合ってほしい。ことばの力を生きる力として、学びあい育ちあってほしい。そう、切実に願っています。

【 美しい学校 】

来校者からの一言として、「美しい学校ですね」は、もっとも嬉しい誉めことばのひとつです。 それもお帰りの際の一言であれば、 なお嬉しいです。

築 40 年超の年季の入った校舎です。 けれども、玄関を入ってすぐのピロティには、職員が朝夕欠かさずモップをかけています。ピロティの先に広がる芝生は、地域の方々が種まきから芝刈り、水やりまで世話してくださっています。 カラフルな遊具は、 職場体験にきた中学生が、 後輩たちのためにと全身ペンキまみれになって塗り替えてくれました。

学校の美しさは、 外見的な校舎の新しさや綺麗さだけで測ることはできません。 子どもたちの学びの場を美しく整えてやりたいという思い。 子どもたち自身の、 学校をより美しくして後輩たちに引き継ごうとする行い・・・。

さらに、学校中にあふれる爽やかなあいさつ。 交わされる朗らかな笑顔。 きりりと整った身だしなみ。 靴の踵（かかと）が揃った下駄箱。 そのような「心映えの美しさ」が、「きれいな学校」にとどまらない、「美しい学校」をつくるものと思います。

【 心のスイッチ 】

年度初めにはいつも、教育界の国宝と称される東井義雄（とういよしお）さん（1912-1991年）の詩、『心のスイッチ』を子どもたちに紹介しています。そして時折、「心のスイッチは入っていますか？」と問いかけます。「心のスイッチ」ということばは、多くを説明しなくても不思議と子どもたちに届くようです。

ある時、一人の子が話しかけてくれました。2学期も、半ば過ぎの頃だったと思います。「校長先生、前に『心のスイッチ』の話、してくれたやろ？ぼく、気もちを切りかえるのが下手くそやったけど、あれからできるようになってん。ありがとう。」

この子は確かに変容著しく、「遅刻やトラブルも減って、勉強もよく頑張っているなあ」と感じていた子でした。先達が遺（のこ）してくださったメッセージと、今を生きる子の「変わりたい」「良くなりたい」という希求が時空を超えて響きあい、成長のスイッチがカチリと入ったのかもしれません。（こちらこそありがとう。）と、そっとつぶやきました。

心のスイッチ

人間の目は　ふしぎな　目
見ようという心がなかったら　見ていても　見えない
人間の耳は　ふしぎな　耳
聞こうという心がなかったら
聞いていても　聞こえない
頭も　そうだ
はじめから　よい頭　わるい頭の　区別があるのではないようだ
「よし、やるぞ！」と
心のスイッチがはいると
頭も
すばらしい　はたらきを　しはじめる
心のスイッチが　人間を
つまらなくもし　すばらしくもしていく
電灯のスイッチが
家の中を明るくもし　暗くもするように

東井義雄「10代の君たちへ　自分を育てるのは自分」、到知出版社、2008年10月30日 第1刷発行、130ページから引用。

おわりに

「元気に登校！笑顔で下校！」の主役はもちろん子どもたちです。けれども学校は、教職員にとっても「元気に出勤！笑顔で退勤！」できる場でありたい。地域にとっても家庭にとっても学校は、元気と笑顔の源としての拠り所でありたい。そう願っています。「子どもたちのために」という価値を共有した大人同士が、元気に笑顔で関係性を紡ぐことで、どの子も取り残されず輝くことのできる、美しい教育環境が実現するのではないでしょうか。

教育環境は“３層のゆりかご”

子どもたちが夢を描いてチャレンジし、思う存分に力を発揮できるようにサポートするのは大人たちの大切な役割です。ここでは、子どもたちが生き生き伸び伸びすごせる「教育環境を整える・つくる」ということについて、教育現場での知見に基づいて掘り下げてみます。

子どもを育む「家庭・学校・地域」のあり方

《ニッケ教育研究所顧問》 勝本 孝夫　元・大阪市立榎本小学校校長（鶴見区）
元・大阪市立姫里小学校校長（西淀川区）

はじめに

出口の見えない暗闇のようなコロナ禍の中でも、希望の光が見えています。それは、未来に生きる子どもたちの明るい笑顔であり、快活な歓声です。たくましくも健気な子どもたちの未来に思いをいたす時、暗闇の中に一条の光が見えてきます。

といっても、新型コロナ感染対策をはじめ、児童虐待や貧困、いじめや不登校等、子どもたちの前に立ちはだかる課題は山積しています。そんな状況下でも、ひたすら“ただ、子どもたちのため”という心情で日夜奮闘されている教育現場の教職員、地域・家庭の方々には、感謝とともに、敬意を表したい思いでいっぱいです。

ポストコロナを見据えて、今一度、子どもたちにとっての「家庭・学校・地域」の意味を再認識するとともに、今後に向けてより望ましい「家庭・学校・地域」のあり方について、捉え直してみたいと思います。

子どもは親の鏡、 社会の鏡、 そして、 学校の鏡

「子どもは真実を映し出す鏡である。彼らには驕(おご)りも、敵意も、偽善もない。もし思いやりに欠け、嘘つきで乱暴な子どもがいたなら、罪はその子にあるのではなく、両親や教師や社会にあるのだ」とは、ガンジーの名言です。常日頃から言われている「子どもは親の鏡」「子どもは社会の鏡」の言葉とも通じます。

子どもの心は本来、真っ白なキャンバスであり、その心にどんな色をつけてあげるのかは、親の責務であり、社会の責務です。そして、学校の責務であると、今こそ再認識する必要があります。その真っ白な心のキャンバスの奥底には、“伸びたい”“成長したい”という、ものすごいエネルギーが横溢(おういつ)しています。どんな子どもでも、“無限の可能性”を秘めているのです。

この、「どんな子どもでも、“無限の可能性”を秘めている」という視座を大前提にして、その可能性を引き出すために、我々大人は、子どもを育む教育環境を整え・つくってあげなければなりません。

環境なくして人はなし、人なくして環境は変わらない。つまり、人と環境とは密接不可分な関係性にあり、教育環境を整え・つくってあげることによって、子どもの“無限の可能性”が引き出されてくるのです。コロナ禍の今ほど、そのことを実感します。

ここでいう教育環境とは、この「図1」が示すように、子どもを“包み込む環境”総体を意味します。「教育環境を整える」とは、今ある教育環境を“より望ましいものに再構築（リメイク）”することであり、「教育環境をつくる」とは、“新たな教育環境を創造（クリエイト）”するという意味です。

３層のゆりかご

子どもを育む教育環境は、「図１」のように、“子どもを包み込む“３層構造になっています。これは、社会へ立派に巣立ちゆくための、いわば“ゆりかご”と言えます。つまり、子どもたちが、ひとり立ちして、未来へ羽ばたいていくための“3層のゆりかご”なのです。そしてこの“ゆりかご”が、“3層のあたたかさ”に包まれていることが、とても大切なのです。

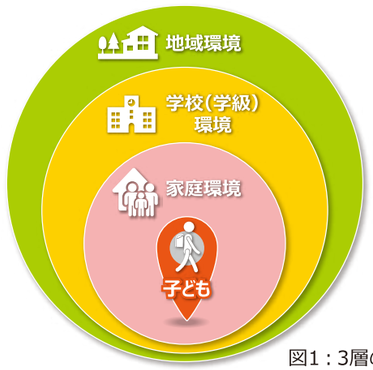

図1：3層のゆりかご

「学校（学級）環境」は羅針盤

ここで注目したいのは、「学校（学級）環境」の位置です。「家庭環境」と「地域環境」との間にあります。 これは、学校（学級）が、 家庭と地域をつなぐ “キーステーション” としての役割があることを示しています。さらに、今の教育状況の流れを射程に据えながら、地域の現状・特質を生かして、家庭と地域がどの方向へ進めば良いのかを示す役割を担っているのです。いわば、「学校（学級）環境」は “羅針盤” なのです。 予測不可能な時代にあって、 “キーステーション” として、また、“羅針盤” として学校が果たす役割は、 ますます大きなものになってきています。

生涯を支える「家庭環境・地域環境」

ところで、子どもが学校以外の多くの時間を過ごす環境、つまり、子どもにとっての生活基盤は、家庭であり、地域です。それを示したのが「図２」の、子どもを包み込む“2層のゆりかご”です。

いずれ学校を卒業しても、子どもにとっての生活基盤は、家庭と地域です。つまり、子どもの育成を支え続けていくのは「家庭環境」と「地域環境」であるとも言えます。

さらに、予期せぬ災害・事故等がいつ起こるか分からない今の時代――子どもの安全・安心を見守る、24時間365日稼働の地域のネットワークの存在が、とても大切なことと言えます。

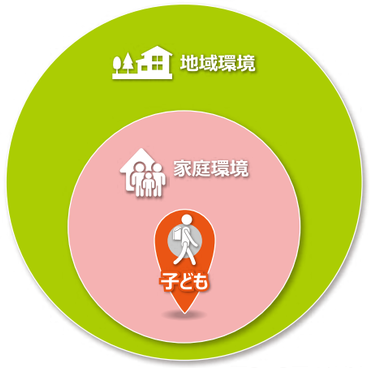

図2：2層のゆりかご

「整える・つくる」の内実は “よりよい関係性づくり”

さて、「教育環境を整える・つくる」ためのポイントは何でしょうか。先の2つの図は、教育環境を構造的に示したものですが、実は、それぞれの環境と環境との“よりよい関係性づくり”こそが、そのポイントになります。

つまり、子どもにとっては、最も身近な家庭とのあたたかな関係性を築くこと、家庭にとっては、子どもと学校（学級）との豊かな関係性を築くこと、学校（家級）にとっては、家庭と地域との心が通い合う関係性を築くこと、そして、地域にとっては、学校（学級）との望ましい関係性を築くことが、「環境を整える・つくる」ためのひとつの内実になります。

そして、それぞれの環境と環境とがよりよい関係性でつながると、全てがつながってきます。教育環境全体が“あたたかい絆”で結ばれるのです。

渾然一体こそ、 めざす姿

未だ経験したことのない未曽有のコロナ禍は、大切なことを気づかせてくれました。そのひとつが、人と人との“あたたかいむすびつき”です。言い換えれば“あたたかい関係性”です。

家庭と学校（学級）と地域とが渾然一体となって、“あたたかいむすびつき”が生まれたならば、教育環境全体が“思いやりとやさしさ”に包まれた“３層のゆりかご”になることでしょう。

“あたたかい3層のゆりかご”で育まれ、巣立った子どもたちは、“社会貢献の翼”を羽ばたかせて、“人々の心の大空”へと雄飛していくにちがいありません。

「たったひとりの子どもを育てるにも、村中の人々の知恵と力を必要とする」 ―アフリカに伝わることわざ―